独立行政法人　国立国語研究所　第２３回「ことば」フォーラム

共催　武庫川女子大学　言語文化研究所

外来語とどう付き合うか

２００４年１１月６日（土）

武庫川女子大学　日下記念マルチメディア館

開場（１３：３０）

開演（１４：００）

開会あいさつ　　国立国語研究所理事　韮澤（にらさわ）　弘志（ひろし）

「外来語の言い換え提案」　相澤（あいざわ）　正夫（まさお）

「外来語を育てるとは」　陣内（じんのうち）　正敬（まさたか）

休憩（１５分間）

質問は，休憩終了までに質問票に記入の上，係に手渡してください。

「暮らしの中の外来語」　佐竹（さたけ）　秀雄（ひでお）

質疑応答

閉会あいさつ　　武庫川女子大学言語文化研究所所長　佐竹（さたけ）　秀雄（ひでお）

終演（１６：３０予定）

お帰りの際に，アンケートに御協力ください。筆記具は受付にあります

御用のかたは，係の者に声をかけてください。

政府刊行物サービスセンターが刊行物を販売しています。

国立国語研究所の研究成果の一部を展示しています。

外来語の言い換え提案

国立国語研究所
相澤 正夫

1.「外来語」言い換え提案とは　―言い換え語の一覧だけが提案ではない―

(1) 提案の趣旨

①公共性の高い場面で外来語をむやみに多用すると、円滑なコミュニケーションの障害になる。

②特に官公庁、報道機関などでは、それぞれの指針に基づいて、言い換えや注釈など受け手の理解を助ける工夫をする必要がある。

③委員会の提案は、そのための基本的な考え方と基礎資料を、具体的に提供するものである。

→ 副題の「分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫」に尽きる。

(2) 提案を利用する際の留意事項

①語による理解度の違いに配慮を。

②世代による理解度の違いに配慮を。

③言い換え語は外来語の原語に対するものではないことに注意を。

④場面や文脈により言い換え語を使い分ける工夫を。

⑤専門的な概念を伝える場合は説明を付け加える配慮を。

⑥現代社会にとって大切な概念の定着に役立つ工夫を。

→ 個々の外来語の特性をとらえて、一つ一つきめ細かな対応を考える必要がある。

2. 提案をささえる調査研究　―科学的な調査データに基づいて議論している―

(1) 「外来語定着度調査」 ← 分かりにくい外来語とは何か

全国の 16 歳以上の男女 2,000 人を対象に、個別面接調査を実施。

①「接触度」― その外来語を見たり聞いたりしたことがあるか。

②「理解度」― その外来語の意味が分かるか。

③「使用度」― その外来語を自分でも使ったことがあるか。

(2) 「全国調査」 ← 外来語についての国民の意識はどうか

全国の 15 歳以上の男女 4,500 人を対象に、個別面接調査を実施。

(3) 「自治体調査」 ← 行政情報の発信者側の意識はどうか

全国の 680 市区町村の自治体首長、広報紙責任者、ホームページ責任者、一般職員を対象に、郵送アンケート調査を実施。

3. 外来語だけの問題か　―情報格差を生まないために―

○外来語に限らず、言葉の「分かりにくさ」は、社会生活に必要な情報を共有するうえで大きな障害になる。

○受け手に配慮した分かりやすい言葉遣いを工夫することが、何よりも大切である。

研究室から

第２回「外来語」言い換え提案をめぐって

●これまでの経緯

国立国語研究所では，平成14年８月に「外来語」委員会を設置し，国の省庁の行政白書や新聞など，公共性の高い場面で使われていながら，一般への定着が不十分で分かりにくい外来語について，分かりやすく言い換えたり，説明を加えたりするなど，言葉遣いを工夫する提案を行ってきました。

平成14年12月には第１回「外来語」言い換え提案の中間発表を行い，その後各方面から寄せられた数多くの御意見を生かしながら，平成15年４月に62語を対象として最終発表を行っています。第１回の最終発表については，本紙16号に詳しい紹介記事があります。

委員会では，ほぼ半年に１回，数十語程度を取り上げて，検討結果を公表することにしています。今回のこの欄では，平成15年11月に47語を対象に行った，第２回言い換え提案の最終発表の概要を紹介します。

●中間発表から最終発表へ

第２回言い換え提案の中間発表は，最終発表の３か月前，平成15年８月に行いました。この中間発表は，第１回最終発表の提案形式をほぼ踏襲しています。しかし，その後の反響から，最終発表では，提案の背景や目的について，改めてはっきりと述べる必要があることを強く感じました。

重要な点は，①公共性の高い場面で外来語をむやみに多用すると，円滑な伝え合いの障害になるので，②特に官公庁，報道機関などでは，それぞれの指針に基づいて，言い換えや注釈など受け手の理解を助ける工夫をする必要があり，③委員会の提案は，そのための基本的な考え方と基礎資料を具体的に提供するものである，ということです。

また，中間発表に対して寄せられた御意見を整理するなかで，特に，次の二つの点に言及する必要を感じました。一つは，言い換え語が外来語に対するものであって，原語である英語等の訳語ではないこと，もう一つは，新たに言い換え語を造語して提案することの意義についてです。

●分かりやすくするための留意事項

言葉遣いの工夫として，言い換え語と説明付与のどちらが有効であるのか，一概には決められません。分かりにくい外来語と言っても，個々の外来語にはそれぞれに固有の背景事情があるからです。

一つ一つきめ細かな対応をすることが大切ですが，どんな場合でも常に念頭におくべき留意事項として，委員会では次の６項目を掲げました。

	全体	60歳以上
○ バーチャル	★★☆☆	★☆☆☆

言い換え語　仮想

用　例　テレビゲーム，携帯電話の普及などによって，子どもの実生活が分断され，分断された子どもの世界に，バーチャルな（仮想の）世界が侵入してきたのである。

意味説明　現実そっくりにつくられ，あたかも現実の世界であるかのような様子

手引き　○英語 virtual は，表面上は違うが実質そのものである様子を意味し，「実質上」などと訳されている。外来語「バーチャル」は，現実そっくりではあるが仮想の世界である様子の意味で用いられ，英語と大きくずれた意味で受け入れられており，言い換え語としては「仮想」が適当である。

○「バーチャルな」には，用例に見るように「仮想の」を当てるとよい。

その他の言い換え語例　仮想世界

複合語例　バーチャルモール＝電子商店街　バーチャルリアリティー＝仮想現実，人工現実感

見出し語の後の星印は国民の理解度。★☆☆☆は25％未満，★★☆☆は25％以上50％未満。

	全体	60歳以上
○ ノーマライゼーション	★☆☆☆	★☆☆☆

言い換え語　等生化　等しく生きる社会の実現

用　例　養護学校との情報交換や<u>ノーマライゼーション</u>（等生化）の理念を教職員や保護者，地域などに浸透させることを提言するものとみられる。

意味説明　障害のある人も，一般社会で等しく普通に生活できるようにすること

手引き
○これからの社会の重要な概念になると考えられ，概念の普及のためにも，分かりやすい言い換えや説明が必要である。
○これまで「共生化」と言い換えられることが多かったが，「共生」は，人間と野生動物との共生，多民族間の共生など，使われる分野が広くなり過ぎ，分かりにくくなる問題がある。「ノーマライゼーション」の意味概念をそのまま移し替えることのできる新語として，「等生化」を提案したい。どの言い換え語を使う場合も，当面は，説明を付与するなどの配慮が必要である。
○話し言葉では「等しく生きる社会の実現」のような言い換えも，耳で聞いて分かりやすい。
○「ノーマライゼーション」は，これまでの福祉が，障害者を一般社会から引き離して，特別扱いする方向に進みがちであったのに対して，すべての人が，同じ人として普通に生活を送る機会を与えられるべきであるという，新しい福祉の考え方を提唱する語である。
○この考え方にもとづいて，実際に福祉環境をきめ細かく整備していこうとする場合は，「福祉環境作り」と言い換えることも有効である。
○障害者だけでなく，高齢者などを含める場合もあるので，説明を付与する場合は，文脈に応じて工夫する必要がある。

その他の言い換え語例　共生化　福祉環境作り

(1) 語による理解度の違いに配慮を
(2) 世代による理解度の違いに配慮を
(3) 言い換え語は外来語の原語に対するものではないことに注意を
(4) 場面や文脈により言い換え語を使い分ける工夫を
(5) 専門的な概念を伝える場合は説明を付け加える配慮を
(6) 現代社会にとって大切な概念の定着に役立つ工夫を

これらのうち，今回新たに取り上げ，注意を喚起したのは，(3)の項目です。言い換え語については，外来語の原語に対するものであるという誤解が，しばしば見受けられます。外来語の意味・用法は，原語での意味・用法をそのまま反映しているわけではありません。むしろ何らかのずれが見られるのが普通です。前ページに示した「バーチャル」の例では，手引きの第1項目で，この点をはっきりと説明しています。

また，(6)の項目に該当するのが，上に示した「ノーマライゼーション」の例です。委員会では，この現代社会の重要な外来語に対して「等しく生きる社会の実現」という意味で，「等生化」という言い換え語を新たに造語しました。この語が「ノーマライゼーション」の表す概念の担い手の一つとなり，その普及定着に役立つものと期待するからです。

●今後の展開

第2回言い換え提案の全文は，研究所のホームページ（http://www.kokken.go.jp/public/gairaigo/）で御覧いただけます。言い換え語の部分だけでなく，分かりやすくするための工夫という観点から，全体として御活用いただければ，幸いです。

委員会では，現在，第3回言い換え提案に向けて検討を開始しています。その候補となる外来語は，すでにホームページ上で公開し，言い換え語をはじめ数多くの御意見をいただいています。それらは，全て委員会での検討に生かされています。

なお，第3回は，中間発表を本年3月，最終発表を7月頃に予定しています。　（相澤 正夫）

研究室から

「日本語の現在」をとらえる調査研究

国立国語研究所では，昨年度（平成15年度）より新たな研究課題として，「『日本語の現在』をとらえる調査研究」（以下「日本語の現在」と略称）を開始しました。ここでは，この企画の概要とこの１年間の成果の一部を簡単に紹介することにします。

●なぜ「日本語の現在」なのか

現代日本語について多角的な調査研究を進めることは，国立国語研究所の中心的な仕事の一つです。これまでにも，書き言葉，話し言葉を問わず，幅広い領域の課題について調査研究を実施し，数多くの成果を公表してきました。しかし，今回改めて「日本語の現在」というテーマを掲げたことには，大きく三つの理由があります。

①緊急性の高い国語施策上の問題の解決に資するために，日本語の現在の状況を的確に把握する必要がある。

研究所は，２年前の平成14年８月に「外来語」委員会を設置し，これまでに２回の「『外来語』言い換え提案」を行ってきました（本紙14号，16号，18号に関連記事を掲載しています）。この委員会の活動を通じて改めて痛感させられたのは，議論を確実かつ健全に展開するためには，外来語の現在の状況に関して「科学的な調査データに基づく信頼度の高い知見が不可欠」ということでした。

②急速に変化する現代社会の言語問題に対応するために，最新の情報に基づいて議論する必要がある。

研究所の従来の調査研究は，研究への着手から結果の公表までにかなりの年月を要するものが多く，信頼度の高い基礎データとしては満足できるものであっても，公表の時点では情報自体がどうしても古くなりがちでした。「日本語の現在」は，できる限りの「最新情報」を，「速報性」を重視して報告・提供することを目指しています。

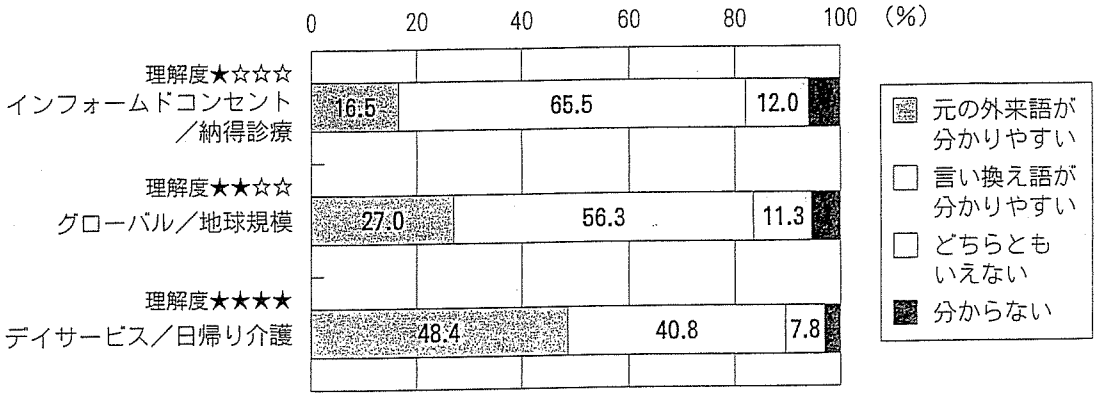
③以上の二点に関連して，総合的な観点から，大規模かつ将来に向けて継続性のある調査研究を設計する必要がある。

過去の言語データを検証しながら，これまでの動向を探るタイプの研究ももちろん必要ですが，これに加えて，現在まさに変化しつつある日本語の生の姿をとらえることが，社会的にも学術的にも強く要請されているのです。

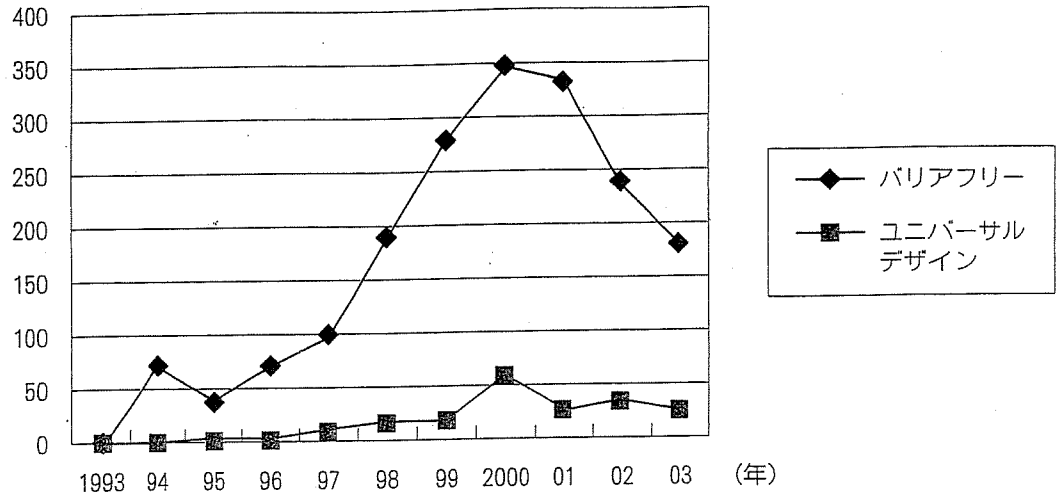
●どんな調査研究を行っているか

調査は対象によって，大きく二つに分かれます。一つは，言葉に関する国民の意識を様々な側面から探る「意識調査」，もう一つは，日本語の実際の在り方を様々な媒体について探る「実態調査」です。意識調査の対象は日本語の使い手である国民各層，一方，実態調査の対象は実際に使われている日本語そのものということになります。

すでに触れたように，現在国立国語研究所では，「『外来語』言い換え提案」を行っています。これは，分かりにくい外来語を分かりやすくするための言葉遣いの工夫についての提案です。そこで，平成15年度は，まず外来語を中心とした言葉遣いを取り上げ，



「言い換え語」の分かりやすさ



『毎日新聞』年次別出現頻度

3種類の意識調査を優先的に実施しました。それぞれの内容は，次の通りです。

①全国調査（国民を母集団とする世論調査型の調査）。対象者は4,500人（15歳以上男女），調査項目は約50項目，調査方法は個別面接法。

②自治体調査（自治体を対象とする情報の発信者側の意識調査）。対象自治体は全国680市区町村，対象者は自治体首長，広報紙責任者，ホームページ責任者，一般職員，調査方法は郵送法。

③外来語定着度調査（「外来語」委員会の言い換え提案のための定着度調査）。対象者は2,000人（16歳以上男女），調査項目は外来語計75語，調査方法は個別面接法。

①の全国調査は『外来語に関する意識調査』として，また，②の自治体調査は『行政情報を分かりやすく伝える言葉遣いの工夫に関する意識調査』として，速報版の報告書にまとめました。③の外来語定着度調査の結果は，「外来語」委員会の審議に直ちに生かされています。

一方，実態調査では，最新の白書（32種）や最近の新聞（主として1990年代から現在まで）等に使われている大量の外来語について，使用頻度，使用される分野や文脈などの情報を整理して，「外来語」委員会に提供しています。また，作成した大量の電子化資料を活用して，外来語の受容過程に関する研究なども行っています。

●成果の一部を紹介すれば

前ページのグラフは，「外来語」委員会が提案した「言い換え語」と「元の外来語」とで，どちらが分かりやすいかを広く国民に尋ねたものです（意識調査の中の「全国調査」より抜粋）。

取り上げた3語のうち，国民の理解度が25%未満と最も低かった「インフォームドコンセント」については，言い換え語の「納得診療」の方を分かりやすいとする回答が圧倒的多数を占めました。また，理解度が25%以上50%未満だった「グローバル」についても，言い換え語の「地球規模」の方を分かりやすいとする回答が過半数を占めています。一方，理解度がすでに75%を超えていた「デイサービス」については，言い換え語の「日帰り介護」よりも，元の外来語の方を分かりやすいとする回答が，若干多いという結果になりました。

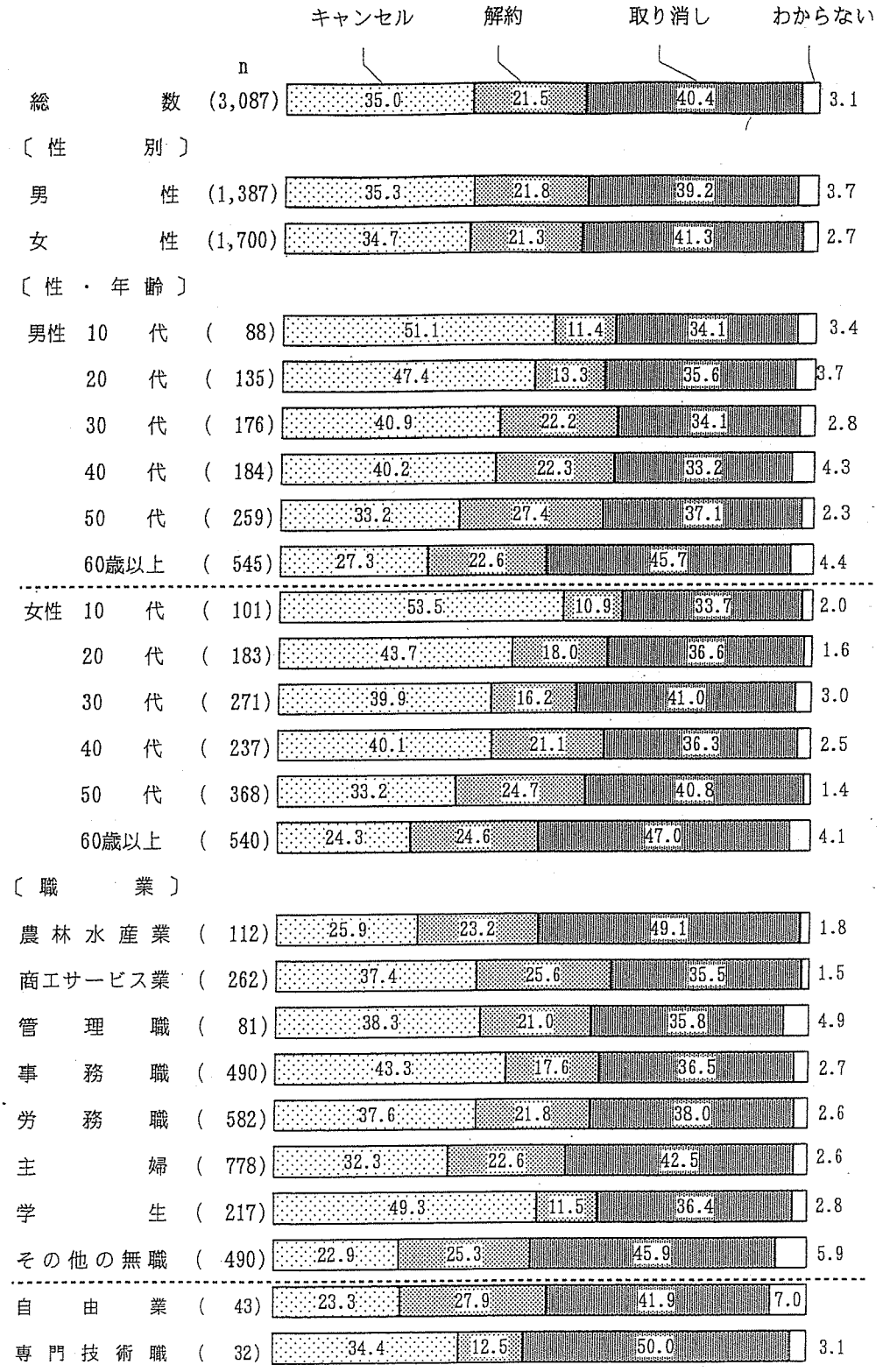
このような調査結果は，委員会が提案した個々の言い換え語が，どの程度まで有効であるのかを確認するための貴重な資料となります。

次に，上に掲げたグラフは，過去10年間に『毎日新聞』に現れた外来語の頻度を，年次別に示したものです（実態調査のデータにより作成）。「バリアフリー」も「ユニバーサルデザイン」も，福祉の分野で新しく登場してきた重要語ですが，このグラフを見れば，この2語がそれぞれ「いつごろ，どのくらい話題になっているか」が一目で分かります。まさに，変化の真っただ中にある外来語の，生きた姿をとらえていることになるわけです。

このような個々の外来語の使用実態についての最新情報も，「外来語」言い換え提案の本文の記述に十分に反映されています。

（相澤 正夫）

“キャンセル” “解約” “取り消し” ーもっとも分かりやすいと思う表現
（性別，性・年齢別，職業別）



＊「自由業」と「専門技術職」は，回答者数が50人より小さいので参照するにとどめ，分析の対象からは外してある。

外来語を育てるとは

関西学院大学
陣内正敬

1　はじめに

何事も、よく育てる、健全に育てるためには、よい土壌と愛情が必要。

2　外来語化についての基本的考え方

（1）　外来語化自体は止められない流れ
　　ことばは歴史的産物、そして、国民性を反映するもの
　　（歌は世につれ、・・・　→外来語は世につれ、世は外来語につれ）

（2）　外来魚と外来語：自然の生態系とことばの生態系
　　和語・漢語・外来語の棲み分け、生息数のバランス

（3）　外来語の正体：外国語が日本語フィルターを通って日本語となったもの
　　外見が変わり、中味も変わる

3　問題点と対策

（1）日本の言語文化の危機？→横に置いておく

（2）日本人の言語生活の健全性？→これを正面に据える

○心構え（発想）：外来語を排斥するのではなく、よく育てる

○やり方（方策）：緩やかな変化（＝増加スピードの調整）を実現する

① ことばの「公共性」と「広告性」（「公共外来語」と「商業外来語」）
　　⇒「通じること」と「感じること」

② ことばの普及度によって、言い換えターゲットを絞る
　　世論調査での理解率 75%未満が対象
　　⇒　普及曲線を考慮した絞込み

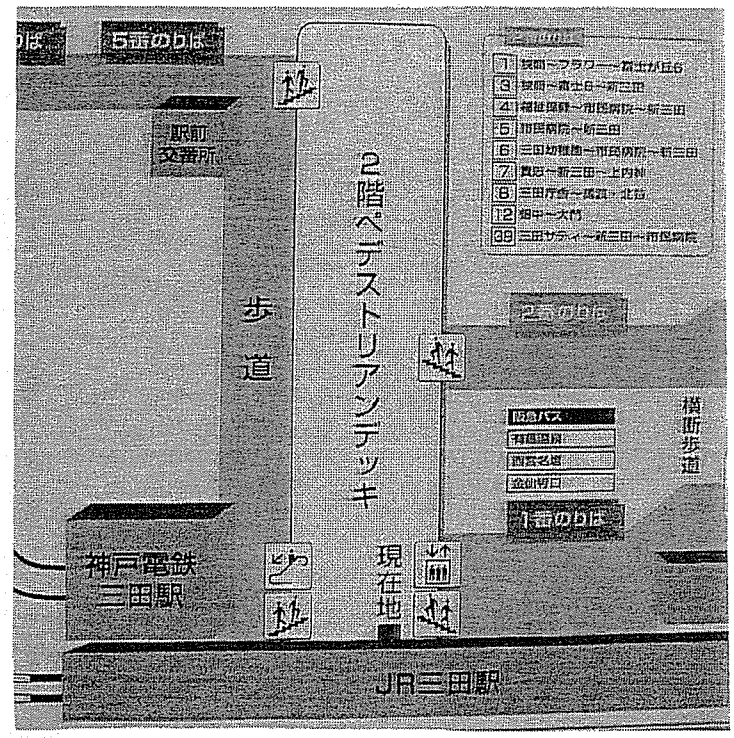
③ 在来語（和語、漢語、なじんだ外来語）をもっと活用する・・・新しいものばかりに目移りしない、ことばの意味の広がりに目を向ける、本当に相手の心に届いているかを見極める、・・・

4　その他・・・言い換えの苦悩

○「分かりやすさ」と「魅力」の関係
　　グローバル、グローバリゼーション　/　地球規模、地球規模化・・・

○ すべての人に「分かりやすい」か？
　　バリアフリー　/　障壁なし　無障壁　段差なし　（壁なし、壁のない）・・・

①



②

③

琵琶湖の外来魚対策奏功

ブラックバス激減

釣り客も減少——貸船業者ら

県は「生態系回復」

ニゴロブナやモロコなど琵琶湖の固有種を食い荒らすブラックバスが激減している。滋賀県が始めた駆除事業や再放流禁止措置の効果が出ているためで、昨年の漁獲量は七十トンと前年比47%減。釣り客も減り、貸船業者は悲鳴をあげているが、県は「琵琶湖の生態系が回復する兆しがある」と今後も駆除を進める方針。

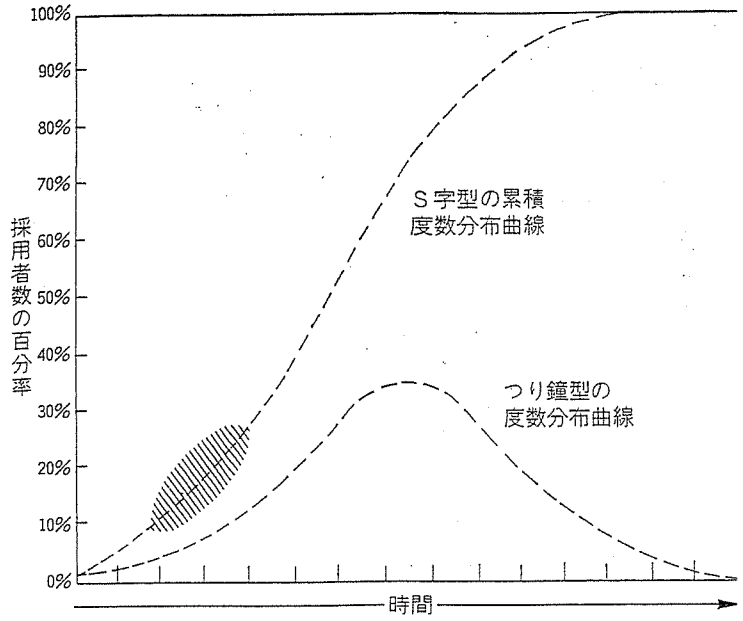
県の二〇〇二年三月の推計によると、琵琶湖にはブラックバス約五百トン、ブルーギル約二千五百トンが生息。同年四月から外来魚の駆除が本格化し、全体の捕獲量は二〇〇二年度が五百二十一トン、二〇〇三年度は四百四十四トンに上った。

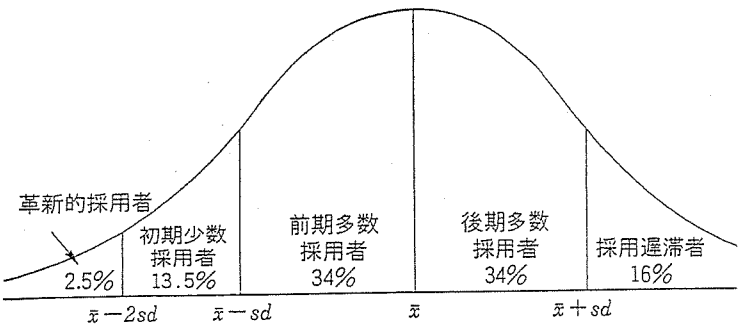
昨年四月には外来魚の再放流を禁じる条例を制定。釣った魚の回収箱や、いけすを五十八か所に設置したほか、外来魚五百グラム当たり50円の地域通貨と交換する事業も始め、昨年は計二十五・五トンを回収した。

こうした取り組みが奏功し、近畿農政局大津統計・情報センターによると、昨

読売新聞（大阪本社版） 2004.10.16 夕刊

④





E.M.ロジャース著，青池慎一・宇野善康監訳　「イノベーション普及学」
産業能率大学出版部（1990年）　P350図7-1，P356図7-2

暮らしの中の外来語

武庫川女子大学 言語文化研究所
佐竹　秀雄

1．外来語は暮らしの中にどのように入ってきているのか

外来語と暮らしとのかかわりを、新聞における外来語の使われ方の調査結果から考える。

(1) 新聞の面別の調査

面	出現率	種類
スポーツ	6.9 (11.0) %	993 語
生　活	4.8 (5.4)	1,299
経　済	4.7 (6.4)	1,145
社　会	3.7 (4.2)	949
投　書	2.4 (2.8)	745
一　面	2.3 (3.0)	774

(出現率のカッコ内の数値は固有名詞を含む場合)

(2) 面別ベスト 15

	(a)	(b)	(c)	社会	一面	投書
1	リーグ	サービス▽	センター	メートル	グループ★	テレビ●
2	チーム	インターネット	センチ	グループ★	ドル	ニュース
3	プロ	グループ★	サービス▽	キロ	メートル	ボランティア
4	メートル	ネット	ホーム	ホーム	キロ	イコール
5	サッカー	システム	ボランティア	ホテル	システム	ガイドライン
6	キロ	メーカー	グループ★	マンション	センター	カード
7	オリンピック	ドル	ケア	センチ	ガス	リストラ
8	シード	ソフト	キロ	シャツ	テレビ●	サービス▽
9	トップ	パソコン	テレビ●	ビル	ケース	バス
10	オープン	デジタル	ケース	ケース	ガイドライン	スーパー
11	アンダー	ベンチャー	グラム	センター	ホテル	プロ
12	シングルス	テレビ●	メーカー	メンバー	ウラン	スポーツ
13	ツァー	ビジネス	トイレ	トン	ホーム	タクシー
14	コーチ	ユーロ	パソコン	テレビ●	レベル	ダイオキシン
15	ゴール	ガス	テーマ	ガス	サービス▽	他 リサイクル他

以上から、次のことが考えられる。

① 面による違い、語による違いがある。→外来語をひとくくりにしてはいけない。

② スポーツ面が異質、経済面が他と少し違う。→外来語使用は専門性とかかわる。

③ 暮らしに身近な生活面と投書面が対照的である。→生活面を通して日常生活に外来語が入ってきている。また、一般の人々にとって、生活面は情報を得る面で、投書面は情報を発信する面だと考えると、一般の人々は外来語使用に対して冷静であると言えないか。

2．外来語が使われる理由

(1) それまで日本になかったものが入ってきた場合。

(2) イメージの新しさを感じさせるため。

例：職業婦人→キャリアウーマン　園芸→ガーデニング　増改築→リフォーム

(3) 婉曲表現として使うため。

(4) 専門用語として使う場合。

3．外来語使用はなぜ問題なのか〈(1)～(3)は一般的な批判意見〉

(1) 外来語使用に世代間の差が認められるので、世代間のコミュニケーションの妨げになる。

(2) 外来語を使うことは日本語の軽視につながり、日本語の伝統を崩すことになる。

(3) 原語から外れた外来語使用や和製英語の濫用は、日本人の外国語学習の障害となる。

(4) 外来語による名づけには、イメージだけで実質とずれる場合が少なくない。また、そのあいまいさのために、時には本質からずれた意味をも表すようになり、誤解(認識のずれ)を招くおそれがある。　例：商品名、職業名など／セクハラ

4．外来語の言い換えの意味

外来語は、いきなり一般の人が使い始めるというものではない。多くは、専門家やマスメディアの手を通じて一般化し普及する。したがって、分かりにくい外来語の氾濫をくいとめるには、

A 専門家・マスメディアの「水際」でチェックをかける(言い換え案を利用してもらう)。

B 一般人の潜在下にある外来語崇拝をなくす(言い換えも可能なことを認識してもらう)。

が考えられる。これらにおける言い換えは、決して無意味ではないと思う。

しかし、Aの場合、その外来語が広まる前の段階であれば言い換えは可能だろうが、現状ではその場合は言い換えが存在しない。すでに広まった外来語の場合には、改めてそれを言い換えてもらうことはなかなか難しい。Bの場合は、人々に言い換えを認めてもらうには、よい言い換えでなければならない。ただ、それ以前に、言い換え利用を含めた外来語使用における意識改革をすることが、容易ではないが、大事だと考える。

5．外来語との付き合い方

「外来語を特別のことばとして考えるのではなく、個々の外来語を使うときにコミュニケーションの道具として適切かどうかを考えるべきである。「外来語だからいけない」ではなく、個々の場合に、どのように伝わるかの判断をする習慣をもつべきである。外来語は、その外見的な効果とそれが表す実質的な意味とにズレが存在しがちなことを、十分に認識して使うべきであるし、他人が使っている場合には、それをきちんと確認する態度が必要である。」

そして、人々がこのような意識・態度をもつように、ことばの研究者は強い働きかけ(訴え・教育・指導)をすべきである。